

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	われわれの論文は美しいか?
別タイトル	Is our paper beautiful?
作成者(著者)	富田, 剛司
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.09
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(3). p.173-174.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r030
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD16721844

われわれの論文は美しいか？

富田 剛司

東邦大学医学部眼科学講座（大橋）教授

「清貧」という言葉がある。社会的身分が高く、その地位や立場を利用すれば十分に高収入が得られるにもかかわらず、自分の使命をわきまえて行動する者、いわゆる私利私欲に走らず公正無私な態度で仕事を行う者はおのずとその生活は質素なものとなる。「清貧」とは、概してこのような人物の生活ぶりを指すらしい。

医者（ここでは臨床医を指す）はどうであろうか。当然であるが、医者は患者のために正しいと信じる医療を行う（本当は、その信じている事柄が、高いエビデンスレベルを持つ必要はあるが）。その結果、今の世の中では少なくとも食べるのには困らない生活はできる。ただ、大金持ちにはなれない。医者は金持ちであると世間では信じられているが、決して大金持ちではない。平均的な医者の年収は、勤務医で1千万円程度。開業医で3千万円程度らしい。大金持ちとはとても言えない。加えて、激務である。当直に明け暮れ、土日なく働き、その結果のこの収入である。勤務医では転勤も多い。転勤に伴う引っ越し費用はすべて自前である。医者の生活はむしろ「清貧」と言われたいくらいである。

さらにこれらに加えて、大学病院の医者においては、教育・研究・診療を行わなければならない、各医局にそれなりの人数がいるから何とかなくてはいるものの、厳しい生活を強いられることになる。このような清貧的生活を知ってか知らずか、大学病院の医者はいわゆる“バイト”が伝統的に認められている（ことが多いと思われる）。

一方、海外では、特に米国の大学病院の臨床系の医者は、少なくとも眼科医はほとんどが開業医と言ってもよいくらいである。大学がある場所とは違う所で開業していて、手術の時には病院の手術室を時間当たり幾らで借りて、さらには病棟も借りて診療をしている。なぜそんな人達が大学の教員名簿に名前を連ねているのかというと、その大学の名のもとに研究活動をしているからである。力のある人は、研究費として莫大な資金を大学に寄付し（結局は自分のためにはあるが）、PhD等の研究員を雇い、自分自身で自

分自身の研究施設を整備するなど、人を含めたありとあらゆる研究に必要なセッティングをほぼ自前で行って活動している。大学は、質の高い研究論文がどのくらい出たかでその大学の“格”が決められるので、優秀な開業医研究者が大学にいてくれるのをよしとしている。いわゆる“ウインウインの関係”のようである。

欧州は米国と日本の中間のような感じで、どこかに“バイト”に行くということはないが、自分のクリニックを持つことは許されていて、そこで週何日は働くことができる。自分のクリニックで患者をたくさん診て、手術患者は自分の大学病院に紹介して自分で手術して年収数億円を稼ぐドイツの眼科医を知っている。ただ彼は論文数も“ものすごい”（欧州では論文を書くために数カ月クリニックを休診にすることもある）。概して海外の医者はわれわれの目から見れば大金持ちである。

話がそれだが、いずれにせよ「大学の教員であり医者であるのだから、教育をし、研究をし、なおかつ昼夜なく、土曜日も日曜日もなく診療を行え」と言われるのは、少なくとも私の場合は体力的にも正直大変つらい。別に大学からそう強いられているわけでは決してないが、日本においては“世間の目”というのはそういう風である、とひしひしと感じる。その結果、研究活動にしわ寄せがきてなかなか論文が書けない、というのがわれわれ特に外科系の臨床医の悩みである。このような愚痴をかつて勤めていた大学の基礎の教授に話したら、彼は真面目な顔になって、「先生達はよくバイトに行っているでしょ。生活費の足しにしているのですか。私は、それはおかしいと思っています。バイトで得た収入は人1人くらい雇うのに十分な額と聞いています。その金で研究者を雇って、その人に研究させたらどうですか。私は常々、なぜ臨床の先生達は『時間がない』と言って論文を書かないのか不思議に思っています。」とのこと。言葉も無かった。

“バイト料”を含め、自分で得た資金を研究につき込むのは研究者としてある意味正しい行いであろう。私には残

念ながらそこまでの覚悟と力はないが、そのようにして完成された研究論文はきっと美しいものに違いない。ただ少なくともわれわれはそのような姿勢で研究をし、論文を書き、かつ診療もしていると自負したい。本号に掲載されて

いる研究成果もまさにそのようにして成された貴重なものである。研究論文は尊く美しいのである。だからこそ、捏造などはあってはならないのである。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2016.r030